
猫のトーニャ 魔法伝！

imaiwa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫のトーニヤ 魔法伝！

【Nコード】

N8661E

【作者名】

imaiwa

【あらすじ】

猫の魔法使いトーニヤの修行風景。

（前書き）

勢いで書きました。推敲一応しましたが、荒いです。

私はトニーヤ、アメリカンショートヘアの雌よ。

そして今、私の頭の中から尻尾の付け根まで何度も往復して撫でてるお方。

魔法つかいピンゲル・ホワイト。このサンソスコ村でちょっとした有名人よ。

白い純白のドレスを着こなし、これまた白い羽帽子が似合う、清楚で可憐な年若い美形の女性。

彼女はこの村を救った英雄なの。何をしたかって？それは……教えあげない。

猫は気まぐれな生き物よ。気が向かないと何事もする気がしないの。当然、教えるって行為も同じ事よ。

さてと、用事があるんだったわ。ちょっと行ってくるね。

あの姿に魔法で変身するわよ。

そう、人間の女の子よ。

私が猫語でもにやもにや魔法を唱えると、体が光り輝き人間の女の子の姿に変わった。

ピンゲル様みたいな美人は無理だけど、それなりに可愛い人間の女の子になれたわ。

ピンクのドレスを着て、赤いリボンが似合ってるの。

「ピンゲル様ちょっと、修行に行ってきます」

「いつてらっしゃい、トニーヤ」

修行って何って？そのうち分かるから今聞かないでね」

さてと、またアイツがこの姿を見つけたらしくやってくるわ。

村の馬鹿餓鬼ルンサック。

あいつ、ませてるのよ、とっても、おませさん。
そして、デブ。

「お、トーニャじゃないか」

「久しぶりだな」

ルンサツクはソフトクリームをペロペロ舐めながら
私の姿を足の先から頭の天辺までその卑しい目を巡らすと
相変わらずの調子で、ワンパターンな事を仕掛けてくる。

身に着けている白のＴシャツのお腹の辺りに大きなへこみをつくって
しゃがんだかと思うと、私の桃色のスカートの下に薄汚い手を入れ
てきた。

そして、その手でスカートをめくり上げ、また中のパンツを拝み
みるの。

これで、何回目かしら？たぶん５回目ね。そうだわきつと。
ごめんなさいね、猫って記憶力が人間より著しく悪くって、すぐ忘
れちゃうの。

そんなことは、どうでもいいわね。

ほら、また馬鹿がより一層不細工な顔に悦を浮かばせ、醜くくして
るわ。

見るに耐えないとはこういう子のためにあるのね。

パンツをまんまと見られたんだろうけど、私そっぴいの気にしない
の。

でも、一言言っただけやらないとね。

「こら、デブ！私の白い下着見た感想いいなさい！」

「ただで毎回見せてあげてるんだから、その代わりに感想を述べ
るのよ！」

私は腰に両腕を当て、上から睨みつけて女王様口調で言っただわ。

さて、このおデブちゃん、何て言うのかしら？

「け！てめーの下着はいつも白じゃねーか」

「たまには赤や、茶色や、青色や、水玉模様の柄パンティ履いてこいよ！」

なんて奴なの！私に注文つけてくるわ、生意気に…。

どうしてやるうかしら。そうだ、村の一番高いところに位置する見張り台に

その大きな巨体を放り込んでやるわ。

「マーシャ、トリケプス、ウンシャコーワ」

私は魔法を唱えると、持っていた木の枝を彼に向けた後、見張り台へと

その先を素早く振りぬいたわ。

馬鹿が浮き上がり、涎をたらしながら手に持ってたソフトクリームを落としたかと思うと

頭から見張り台の籠へと吸い込まれていく。

あーあ、ちょっとやりすぎたかな？

死んだかしら。私が少し仏心抱いて、見張り台の上方へと視線を動かすと

頭を巢から出した雛のように、口を尖らせて何か言ってるのが見えるわ。

でも、この距離じゃ全然聞こえないのよね、ああ、静かでもいいわ。

そうだったわ、こんな事してる場合じゃないの。
外にある修行場へ行かないとね。何するかって？

教えてあげようかな、まあいいかな。

盗賊の砦に行つてそこで魔法を思いつきりつかつて、盗人どもを蹴散らしに行くのよ。

それが『修行』なの。

魔法の練習台としてあの哀れな人たちを的にするのよ。

何で彼等を哀れつていうのかって？

私が哀れだと思つたからよ。人の物盗んで、働きもせず生きていくって

ある意味哀れだと思わない？一生を通して、働く喜びを知らず、周
りから

泥棒するもんだから蔑まれる。こんなやつて哀れ以外に言葉見つかるかしら？

まーそんなことはいいわね。よし、その哀れな奴等を苛めにいくかもっと哀れにしてやるのよ、フフフ♪

「おいで、魔法鳥コンコース」

ポケットから出した金色の笛を奏でると、コンコースはどこからともなく大きな羽を広げ

台風のような激しい風を伴い、降りてきたわ。

その巨体に覆い潰されるように、私の姿は隠されるの。

こう見えても目立つのが大好きなの私。

隠されるのなんて虫唾が走るわ。

私は存在感をアピールするために、杖を自分の胸に当て、巨大化魔法を発動させるの。

みるみる大きくなるの、胸が？確かにそこだけ大きくなるなら幸せよ。でもこの魔法は均等に大きくするの、残念。

さて、コンコースにまたがるわよ。この子の背中はとてもふわふわした毛並みで
気持ち良いのよ。でもそれだけじゃなく、力強い、私の巨体に乗せて空に舞うことができるほどにね。

「そらいけー！」

ギュフィフイーン！

変な鳴き声でしょ、でもそれを言っちゃ駄目よ。
この子こう見えて、傷つきやすいんだからね。
私に乗せたコンコースはジェット機のように、空に集まる空気をその大きな羽で切り裂いていくわ。その際、轟音を撒き散らせながら。

「さすが、コンコース！早いわね！」

ギュフィフイフイーン！

喜んでるわ、褒めると調子に乗りやすいの。

あーあ、体をよじらせ、空をかき回すみたいに、飛び始めたわ。

こうなると、この子に捕まる私も必死にならないと、振り落とされて地上に落ちてしまうわ。

私はコンコースの背中に持てる力を振り絞りしがみ付くと、コンコースの頭に頭突きをするの。

もちろん、気を失わない程度にね。

しばらくすると、その頭突きの効果が現れたのか、コンコースは冷静を取り戻し始めたわ。

「助かった…」

私は安堵の息を漏らすと、コンコースに向って一言大きな声を張り上げる。

「こら、皆いかんかばけ」

ギュワワーン！

ちよつときつかったかしら…、鳴いてるわ、もとい、泣いてるわ。コンコースは頭が良いからすぐに私の言葉を耳にすると左旋回して、盗賊の皆を私の視界へ映してくれる。

「さあ、行くわよ、コンコース！」

ちなみに言つとくと、コンコースは雌よ。
だから彼女って呼ぶわね。

彼女の頭に伸びている、三本の褐色の毛を私は上に思いっきり引き伸ばすと
羽を折りたたみ、皆へと真直ぐ急降下していく。

「イケイケー！」

私は彼女にしがみ付きながら、魔法を唱える。

「バリカンファイアー！」

わたしの体を炎が包むと彼女はそれを体に吸収するの。
そして、それを体内で凝縮すると、大きなくちばしを上下に目一杯開ききって

口の内部から大きな火の球が出てきたわ。

その際喉を焼くのか、彼女は悲鳴みたいな声をあげるけど気にしないわ。

いつものことだもん。

炎をやっと喉を通して、くちばしで啜えると、彼女は嘶くの。

ギャワワワーン！

その雄たけびが空を切り裂く轟音をもかき消すと

大きな炎の球がくちばしから高速で放たれ、盗賊の砦へと向っていくわ。

「終りね！」

私はそうコンコースに笑顔で言うと、炎球が盗賊の砦に届く前に足で彼女の左腹を蹴りこみ180度旋回させ、村の方向へ向かせるの。

その数秒後後ろから、爆裂音のようなものが聞こえ、私の背中を熱気を交えた

強い空気の流れが押さえ込んでくるけど、気にしないわ。

だって、今日の修行はこれで終りだもん、もう帰るだけの話し。

でもちよっと、いきなり決めちゃったから、魔法一杯使えなかったわ。

今日はレベルあがないわね。まあ、またあの砦が復興したら、修行に行かなくっちゃ！

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8661e/>

猫のトーニャ 魔法伝！

2010年10月23日14時38分発行